

解 答

□

- 問1 大頭で足が短くなっている自分のかけが、もう少しかっこうよくなること。
- 問2 笛の音を聞いて、早く本郷に着いてお祭りを見たい、と心がはやったから。
- 問3 長く生きてきたおばあさんの言うことなので打ち消す自信がなく、本当に文六ちゃんに狐がつくかもしないと感じてしまったから。
- 問4 ひるまはかけが少なく、太陽の光の中でいろいろなものがはっきりと見えるので、何かを「怖い」と思う気持ちにとりつかれにくいから。
- 問5 人形のぶきみな様子を怖がる心が、同じ「怖いもの」として、文六ちゃんに狐がつくのではということを思い起こさせたから。
- 問6 早く家に帰って、文六ちゃんが狐につかれたかもしないとおそれる気持ちから解き放たれたかったから。
- 問7 文六ちゃん以外の子どもたちが、人間の咳ではなく狐の鳴き声だと思っていることを表すため。
- 問8 文六ちゃんが狐につかれたと思って怖くなり、文六ちゃんを気づかう余裕をなくしているから。
- 問9 自分の小さい影法師が、人間のかけではなく、狐のかけだから小さいのではないかと感じたから。
- 問10 文六ちゃんが狐になったからという理由で、文六ちゃんを家から追い出してしまうこと。
- 問11 はじめは、いかにも子供らしい質問だと軽い気持ちで話を合わせていたが、文六ちゃんが真剣に悩んでいることが分かり、母親として心から真剣に考え、話すようになっている。
- 問12 母ちゃんがいなくなったらいやだと大泣きする文六ちゃんに、自分への純粋な愛情を感じ、文六ちゃんをいじらしく、また、ありがたく思って、胸がいっぱいになっている。

□

- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|-----------|
| ① 整〔える〕 | ② 往復 | ③ 修〔める〕 | ④ 調停 | ⑤ 故障 |
| ⑥ 快適 | ⑦ 博識 | ⑧ 選出 | ⑨ 故人 | ⑩ 心臓 |
| ⑪ 裏側 | ⑫ 通説 | ⑬ ヒタイ | ⑭ フル〔い〕 | ⑮ ヤワ〔らげる〕 |
| ⑯ ランオウ | ⑰ キズ〔く〕 | ⑯ ジンジュツ | ⑯ ハブ〔く〕 | ⑰ ムラ〔がる〕 |

解 説

[一]

- 問一 「あまりかっこうがよくないので」走ってみたとあるので、走ることで「かっこうがよく」なると期待したものです。直前の文に「じぶんじぶんのかけ」を見て「大頭で足が短い」と思ったとあります。
- 問二 足がはやくなつたのは夜風の運ぶ笛の音を聞いたからです。子どもたちが今夜本郷へ向かうのは、「夜のお祭りを見るため」ですから、「ああ、笛の音が聞こえてきた。早くお祭りが見たい！」と、意識せども足がはやまつたのだろうと想像できます。
- 問三 まず、何を心配したかですが、「やれやれ～というだに」と言ったおばあさんの言葉が本當になるのを心配したと考えられます。「嘘だ」「迷信だ」と口では否定しながらも、その心配を振り払えない子どもたちの思いを読み取ります。
- 問四 直前に「うしろで糸をひく人が」いることを「子どもたちはよく知っている」と書いてあるように、昼間は明るく、いろいろなことのからくりがよく見えるので、子どもたちはだまされにくいのです。しかも、お日様の明るい力が、子どもたちの心を強くするのですね。心の持ちようが違うため、「ぶきみ」だとは思わず、「ゲラゲラ笑う」ことになります。
- 問五 今、子どもたちの心は目の前の人形のぶきみな様子に、すっかりおびえ、ちぢみあがっています。おびえる心は、別の「こわいもの」の記憶をよびさますものです。心の奥にひっかかっていた「文六ちゃんが狐につかれるかもしれない」という話の記憶ですね。
- 問六 問二では「早く祭りを見たい」という「楽しみ」から足が速まつてましたが、こちらはまったく逆で、「早く目的地（ここでは家）に着きたい」という気持ちは同じものの、「おそれ」が子どもたちの足をはやめています。みんな「文六ちゃんはすでに狐にとりつかれてしまつているかもしれない」という恐怖に支配されており、一刻も早く、安心できる家に帰り着きたいと思っているのです。
- 問七 初めの咳は、誰がしたか特定できていないため、ただの「咳」でしかありませんでした。しかし、それが、（狐にとりつかれていると思われている）文六ちゃんがした咳だと特定されると、子どもたちには、その「コン」は「特別の意味」をもってきます。単なる「咳」ではなく、「狐の鳴き声」である、という意味です。
- 問八 いつも親切な義則君ですから、平常心でいたなら、咳をする文六ちゃんに羽織を貸してくれたでしょう。しかし

今夜は、他の全ての子どもたちと同様に、義則君も、「文六ちゃんは狐につかれている」と恐怖心とともに思い込んでしまっていますから、声をかけてくれるはずもありません。

問九 「小さい影法師」はもちろん、文六ちゃん自身の影なのですが、ここで小さく映った影は、自分の中にいる狐をうつしているから小さいのでは、と文六ちゃんに感じられたのでしょう。だから直後の文で「自分はほんとうに狐につかれているかもしれない」と心配になったのです。

問十 「おそれているか」ですから、「そうなったら困る」と思われる内容を書きます。実際にこの後の場面で文六ちゃんがお母さんにたずねている部分が、手がかりになりますね。お母さんは「そしたら（＝文六ちゃんが狐につかれたら）もう、家におくわけにやいかないね」と言い、それを聞いて文六ちゃんは「さびしい顔つき」をしていましたから、ここから文六ちゃんが、捨てられること、家から追い出されることをおそれていることがわかります。

問十一 Aの時点では、こどもらしい発想を可愛いと思う程度で、Bでもまだ子どもに合わせる意味での表面的なまじめさしかありません。しかし徐々に文六ちゃんの真剣な思いに引きずられるように話への感情移入が進んでいき、Cでは、母親としての真剣な気持ちをまじめに答えるように変わっています。

問十二 あくまでたとえ話だったはずの内容に、すっかり気持ちが入り込んだ文六ちゃんは、「母ちゃんがいなくなったらいやだ！」とお母さんの胸にしがみついて大泣きします。その、素直でまっすぐな自分への愛情が、お母さんの胸を打ったのです。このお母さんの涙は、わが子への愛情の涙であり、またわが子に慕われることへの感激の涙であります。